

本邦におけるノスタルジアの機能的特徴：感傷を伴う懐かしさという観点から

著者	長峯 聖人, 外山 美樹
著者別名	NAGAMINE Masato, TOYAMA Miki
雑誌名	筑波大学心理学研究
巻	56
ページ	21-26
発行年	2018-08-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00153636

本邦におけるノスタルジアの機能的特徴 ——感傷を伴う懐かしさという観点から——

筑波大学大学院人間総合科学研究科 長峯 聖人

筑波大学人間系 外山 美樹

The functional features of nostalgia in Japan: Focus on the concept of “*natsukashisa* with sentimentality”

Masato Nagamine (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Miki Toyama (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Many studies have been conducted on nostalgia outside Japan, whereas only a few studies have been conducted in Japan. This study proposed that by explaining nostalgia with the concept of “*natsukashisa* with sentimentality”, results of previous studies on functional features of nostalgia in English-speaking countries would be replicated, and we conducted two studies. Studies 1 and 2 compared functional features of “*natsukashisa* with sentimentality”, including increased authenticity, respectively under normal conditions or threat to the self. Both of two studies were conducted on undergraduate students, 82 students participated in study 1, and 45 students participated in study 2. These studies supported our hypothesis. Finally, future perspectives on studies of nostalgia in Japan were discussed.

Key words: nostalgia, bittersweet, *natsukashisa*

人は時折、過ぎ去った過去に思いを馳せ、快とも不快ともいえない複雑な感情を経験することがある。これはノスタルジア (nostalgia) と呼ばれる感情である。ノスタルジアには様々な定義が存在するが、多く用いられる定義の1つが “a sentimental longing for one’s past” である (Sedikides, Wildschut, Arndt, & Routledge, 2008)。この定義から分かるように、ノスタルジアは過去に対する感傷的な憧れや恋しさを含むアンビバレントな感情である (Stephan, Sedikides, & Wildschut, 2012)。このノスタルジアは近年、様々な適応の結果をもたらすということから注目を集めており (Routledge, Wildschut, Sedikides, & Juhl, 2013)、多様な領域に

における適応性に寄与することが示されている。

ノスタルジアは英語圏の言葉であるが、ノスタルジア研究は多くの国々で実施されており、本邦においても例外ではない。本邦におけるノスタルジアの実証研究の1つに、長峯・外山 (2016a) がある。長峯・外山 (2016a) は「英語圏の概念であるノスタルジアを、日本人は経験することができるのか」という研究目的の下で実験を行った。その内容は、英語圏における定義の直訳である「個人の過去に対する感傷的な思慕」を用いてノスタルジアを説明したうえで、ノスタルジアの質的特徴 (ノスタルジアの感情そのものに関する特徴) や機能的特徴 (ノスタルジアを感じることによる影響に関する特徴) が再現されるかどうかを検討するものであった。実験の結果、質的特徴に関しては英語圏の研究結果と概ね類似する傾向がみられたが、機能的特徴に関して

は英語圏の研究結果が全く再現されなかった。長峯・外山 (2016a) ではこの結果を、機能的特徴の文化差や使用した尺度による影響であると考察しているが、そもそものノスタルジアの説明に問題があった可能性が考えられる。「個人の過去に対する感傷的な思慕」はあくまで英語圏における定義の直訳であり、それを用いたところでノスタルジアと同じ感情が日本人においても喚起されるかどうかは分からない。特に、「思慕」という言葉は日常においてあまり馴染みがない言葉であると考えられ、イメージがしにくい可能性がある。様々な適応性に寄与するという機能的特徴はノスタルジアという概念を表すうえで非常に重要な要素である (Routledge et al., 2013)。したがって、日本人がノスタルジアを経験できるという結論を導くためには、ノスタルジアの機能的特徴が再現される必要があり、そのためにどのような言葉がノスタルジアを説明する際に適切かを検討しなければならないだろう。

本邦においてノスタルジアと同義として扱われており、なおかつ日常的に馴染み深い言葉としては「懐かしさ」がある (e.g., 楠見, 2014)。「懐かしさ」は質的特徴においてノスタルジアとの類似性が高いことが示されており (楠見, 2014)、ノスタルジアの国際比較研究においても日本におけるノスタルジアとして用いられている (Hepper et al., 2014) など、一見ノスタルジアを「懐かしさ」という言葉で表現することには問題がないように思われる。

しかし、「懐かしさ」とノスタルジアには概念的な差異があることが示唆されている。具体的には、「懐かしさ」はノスタルジアと比較してポジティブな要素が強く、ネガティブな要素が弱いこと (菅原他, 2018)、ノスタルジアの喚起によって自己連続性が高まるという結果 (Sedikides, Wildschut, Routledge, & Arndt, 2015a) が「懐かしさ」を喚起した際にはみられなかったこと (津村, 2015: 研究1) などが明らかになっている。そもそも語源がネガティブなノスタルジアと異なり、「懐かしさ」は「懐く」というポジティブな言葉を語源にした概念である。したがって、「懐かしさ」はノスタルジアよりもややポジティブな意味合いを持っていることが考えられる。こうしたノスタルジアと「懐かしさ」の差異に関して津上 (2009) は感性史の観点からレビューを行い、「懐かしさ」はノスタルジアとほぼ同様の概念ではあるものの、ノスタルジアの要素の1つである「感傷」を欠いていると述べている。実際、ノスタルジアは数多くの定義を持つもののそのほとんどが“sentimental”という言葉を含むという点では一貫しており (e.g., Hepper, Ritchie,

Sedikides, & Wildschut, 2012; Sedikides et al., 2008; Wildschut, Sedikides, Arndt, & Routledge, 2006)、ノスタルジアという概念を語るうえで「感傷」という要素が重要であることが考えられる。

この点を補完した概念として、「感傷を伴う懐かしさ」がある (長峯, 2016; 長峯・外山, 2016b)。「感傷を伴う懐かしさ」は、「懐かしさ」の中でも特に「感傷的」な要素を含む感情であり、全般的な「懐かしさ」よりもノスタルジアに近い概念であることが想定される。ノスタルジアの特徴の1つであるアンビバレントな感情の生起に関して、両者の差異を実証的に示した研究として長峯 (2016) がある。長峯 (2016) は、全般的な「懐かしさ」を喚起した際にはアンビバレントな感情が生起しにくかった一方で、「感傷を伴う懐かしさ」を喚起した際にはアンビバレントな感情が生起しやすいことを明らかにしている。この結果は、感傷という要素を強調したことによって、「感傷を伴う懐かしさ」がよりノスタルジアに近い特徴を持っていることを示唆しているものと考えられる。

「感傷を伴う懐かしさ」は、アンビバレントな感情を生起させるという以外に、その質的な特徴においてもノスタルジアとの類似性が高いことが明らかになっている (長峯・外山, 2016b)。長峯・外山 (2016b) では、ノスタルジアのトリガーとなる出来事の特徴を分類した Wildschut et al. (2006) と同様のカテゴリーを用いて、「感傷を伴う懐かしさ」のトリガーとなる出来事を分類した。その結果、ノスタルジアと「感傷を伴う懐かしさ」は、トリガーとなる出来事の特徴が (a) 自己が主体となり、他者が存在している、(b) おおむねポジティブに捉えられているが、一部ネガティブに捉えられている部分があるという点で同様の特徴を持つことが明らかになった。

このような結果から、「感傷を伴う懐かしさ」は質的な特徴において、ノスタルジアと非常に類似していることが示唆される。このことを踏まえると、長峯・外山 (2016a) では得られなかったノスタルジアの機能的特徴の再現が、「感傷を伴う懐かしさ」を説明材料として用いることにより、達成される可能性がある。実際にその結果が得られれば、本邦におけるノスタルジアの説明として「感傷を伴う懐かしさ」を用いることが適切であることが示唆されるだろう。このことは、本邦におけるノスタルジア研究を進展させるうえで重要な知見になりえると考えられる。また、ノスタルジアの機能が東洋文化と西洋文化で異なるという可能性が指摘されており (Baldwin, Biernat, & Landau, 2015)、本研究はそう

したノスタルジアの文化比較を精緻に行ううえでの一助となりえると考えられる。

以上を踏まえた本研究の目的は、ノスタルジアを、「感傷を伴う懐かしさ」という概念を用いて説明したうえで、その機能的特徴が再現されるかどうかを検討することである。機能的な特徴の指標としては、本来性 (authenticity) を取りあげることとする。本来性とは、自己の内的な目標、気分、感情、経験、行動などに対する正しい意識や理解のことであり、自己概念の中核をなすものである (Kernis & Goldman, 2006)。近年、ノスタルジアが持つ多くの機能の根幹に本来性の向上があると指摘されており、ノスタルジアが喚起されると本来性を高く認知することが実証的に示されている (Baldwin et al., 2015)。そのため、「感傷を伴う懐かしさ」を用いてノスタルジアを説明した際の機能的な特徴の指標としては、本来性が適していると考えられる。

先行研究の多くは、ノスタルジアの適応的な機能を検討する際に平時の状況での効果をみている (e.g., Sedikides et al., 2015a; Wildschut et al., 2006)。一方で、ノスタルジアが持つ機能の本質はネガティブな脅威に対する緩衝効果にあるという指摘 (Routledge et al., 2011; Sedikides et al., 2008) から、平時の状況に加え脅威を操作的に与えた状況でノスタルジアの効果をみる研究も存在する (Baldwin et al., 2015; Vess, Arndt, Routledge, Sedikides, & Wildschut, 2011)。したがって、本研究においても、「感傷を伴う懐かしさ」を用いてノスタルジアを説明した際の機能的特徴をより精緻に検討するため、この2つの方法をいずれも用いたうえで検討を行う。研究1では、平時の状況において「感傷を伴う懐かしさ」を用いてノスタルジアを説明し、ノスタルジアを喚起させた場合に本来性を高く認知するかについて、研究2では、本来性への脅威を与えられた状況において研究1と同様の結果が得られるかについて検討を行う。

ノスタルジアの喚起については、Event Reflection Task (ERT: 長峯・外山, 2016a; Sedikides et al., 2015b) を用いる。ERTは特定の出来事を想起させ、その出来事のキーワードと具体的な内容を記述させるという手続きである。本研究では、ノスタルジア群に対してノスタルジックな出来事の想起を、統制群に対しては、日常的な出来事を想起させ、キーワードと内容を記述させる。この手続きは多くの先行研究で用いられており、高い信頼性と妥当性が確認されている (Baldwin et al., 2015; Hepper et al., 2012)。

なお、先行研究の多くが大学生を対象とした検討

を行っている (e.g., Hepper et al., 2012; Wildschut et al., 2006) ことから、本研究でも大学生を研究対象とする。

本研究の仮説は、以下の通りである。

概念説明として「感傷を伴う懐かしさ」を用いてノスタルジアを喚起させた際に、本来性を高く認知する。

研究 1

目的

研究1の目的は、「感傷を伴う懐かしさ」を用いてノスタルジアを喚起させることで、本来性を高く認知するかどうかを検討することであった。

方法

実験対象者 大学生82名が実験に参加したが、6名は教示に従っていなかったため分析から除外した。最終的な分析対象者は大学生76名 (男性30名、女性46名) であり、平均年齢は19.68歳 ($SD=1.60$ 歳) であった。

出来事の想起 ERT (長峯・外山, 2016a; Sedikides et al., 2015b) を用いた。実験参加者は、ノスタルジックな出来事を想起する群 (ノスタルジア群)、日常的な出来事を想起する群 (日常的記憶群) のいずれかヘランダムに割り当てられた。ノスタルジア群に対しては、長峯・外山 (2016a) を参考に、ノスタルジアを「ある過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的 (センチメンタル) な気持ちになること」として説明したうえで、「あなたの人生におけるノスタルジックな出来事について思い出してください」と教示した。その際、「ノスタルジアが感じられていることをノスタルジックと表現する」という一文を教示の前に加えた。日常的記憶群に対しては、「あなたの人生におけるありふれた出来事について思い出してください」と教示した。ノスタルジアに関する説明は、ノスタルジア群のみ行った。いずれの群においても、出来事を1つだけ想起し、その後で出来事に関するキーワードを4つ書いたうえで詳細な内容を記述するよう求めた。出来事の想起および記述の時間は、先行研究 (e.g., Wildschut et al., 2006) と同じく6分間とした。人数の内訳は、ノスタルジア群が40名 (男性14名、女性26名)、日常的記憶群が36名 (男性16名、女性20名) であった。

操作チェックの項目 Wildschut et al. (2006) を参考に作成された長峯・外山 (2016a) の3項目 (「私は今、じんわりとノスタルジックになっている」、「私は今、ノスタルジックな考えが浮かんでいる」、

「私は今、ノスタルジックな気持ちになっている」を用い、6件法(1. 全くあてはまらない~6. 非常によくあてはまる)で尋ねた。この変数は、実験参加者がノスタルジアをどの程度感じているかをチェックする目的で使用した。分析の際は、3項目の得点を合成した数値を用いた。なお、項目を提示する前に出来事の想起時と同様の形式で、ノスタルジアに関する説明を加えた。この説明は群に関係なくすべての参加者に対して行った。

本来性 本来性を測定する尺度として伊藤・小玉(2005)の本来感尺度を用いた。全7項目について、それぞれ5件法(1. あてはまらない~5. あてはまる)で尋ねた。この尺度は特性的な本来性を測る尺度であるため、教示の際には「今の自分に対する考え」について回答するよう求めた。分析の際は、7項目すべての得点を合成した数値を用いた。

倫理的配慮 本研究における実験は、著者が所属する大学に開設されている研究倫理委員会の承認を得て行われ、実験の前に実験参加者に対し、倫理的配慮について十分に説明したうえで同意書への記入を求めた。

実験の手続き 実験は1人ずつ、実験室にて行った。初めに群ごとに出来事の想起および内容の記述を求めた。実験参加者が記述を行っている間、実験者は実験室から退出し、6分後に再び実験室に戻った。その後、実験参加者から想起内容を記述した用紙を回収し、操作チェックの項目および本来性を尋ねる質問紙にそれぞれ回答するよう求めた。最後にデブリーフィングとして実験の真の目的を伝え、実験参加者に不明な点がないことを確認したうえで実験を終了した。

結果と考察

操作チェック ノスタルジアが喚起された程度が群間で異なるかどうか確認するため、操作チェックの得点($\alpha = .85$)を従属変数とした t 検定を行った。その結果、群間で有意な差がみられ($t(74) = 4.47, p < .01, d = 1.02$)、ノスタルジア群($M = 14.13, SD = 2.04$)の得点が日常的記憶群($M = 11.28, SD = 3.41$)よりも高かった。

本来性 出来事の想起後において、ノスタルジア群が日常的記憶群よりも本来性を高く認知するかどうかを検討するため、本来性の得点($\alpha = .80$)を従属変数とした t 検定を行った。その結果、群間差が有意であり($t(74) = 2.10, p < .05, d = 0.48$)、ノスタルジア群($M = 23.83, SD = 4.86$)は日常的記憶群($M = 21.50, SD = 4.80$)よりも得点が高かった。

研究1の結果、ノスタルジアを「感傷を伴う懐か

しさ」という概念を用いて説明し、喚起させた場合には、先行研究と同様に本来性を高く認知しやすいことが示された。この結果は仮説を支持するものだった。しかし、研究1で検討したのはあくまで平時の状況における結果である。冒頭でも述べたように、ノスタルジアの機能的な側面における特徴を検討する際に、平時の状況での効果を見る場合となんらかの脅威が与えられた後の効果を見る場合の2通りがある(Baldwin et al., 2015; Vess et al., 2011)ことから、脅威が与えられた後においても同様の結果が得られるかを検討する必要もあるだろう。そこで研究2では、研究1と同一の指標を用いたうえで、本来性への脅威が与えられた状況における結果を検討することにする。

研究 2

目的

研究2の目的は、研究1の結果が本来性への脅威が与えられた状況においても再現されるかどうかを検討することであった。

方法

実験対象者 大学生45名が実験に参加したが、1名は教示に従っていなかったため分析から除外した。最終的な分析対象者は大学生44名(男性12名、女性32名)であり、平均年齢は21.41歳($SD = 1.02$ 歳)であった。

本来性への脅威 Baldwin et al. (2015)を参考にして刺激を作成し、それを用いて本来性への脅威を与える操作を行った¹⁾。この刺激は、本来性の簡易的な説明(本当の自分はどのような人か)を提示したうえで、本来性へ脅威を与える状況、経験などについて4分間記述してもらうというものであった。時間は予備調査を踏まえて設定した。この操作は、すべての参加者に対して行った。

出来事の想起 研究1と同様、ERTを用いた。手続きは研究1と同様であった。人数の内訳は、ノスタルジア群が23名(男性6名、女性17名)、日常的記憶群が21名(男性6名、女性15名)であった。

操作チェックの項目 研究1と同様の形式で長

1) 刺激に関しては大学生16名を対象に予備実験を行い、刺激の前後で本来性を測定する尺度(伊藤・小玉, 2005)へ回答を求めた。対応のある t 検定を行ったところ、刺激後の本来性が刺激前の本来性と比較して有意に低かったため($t = 3.10, p < .01, d_p = 0.78$)、本刺激が本来性への脅威として一定の妥当性を有すると判断した。

峯・外山 (2016a) の3項目を尋ねた。

本来性 研究1と同様、伊藤・小玉 (2005) の本来感尺度を用いた。

倫理的配慮 本研究における実験は研究1と同様、著者が所属する大学に開設されている研究倫理委員会の承認を得て行われた。

実験の手続き 研究1と同様、実験は1人ずつ、実験室にて行った。まず本来性への脅威を与えた後、群ごとに出来事の想起および内容の記述を求めた。研究1と同様、実験参加者が記述を行っている間に実験者は実験室から退出し、6分後に実験室へと戻った。その後、研究1と同様に、操作チェックの項目および本来性を尋ねる質問紙にそれぞれ回答するよう求めた。最後にデブリーフィングを行い、実験参加者に不明な点がないことを確認したうえで実験を終了した。

結果と考察

操作チェック 研究1と同様、ノスタルジアの程度が群間で異なるかどうかを確認するため、操作チェックの得点 ($\alpha = .88$) を従属変数とした t 検定を行った。その結果、群間で有意な差がみられ ($t(42) = 2.50, p < .05, d = 0.76$)、ノスタルジア群 ($M = 14.13, SD = 2.26$) は日常的記憶群 ($M = 11.71, SD = 3.98$) よりも得点が高かった。

本来性 本来性の脅威を与えられた後で出来事を想起した際、ノスタルジア群が日常的記憶群よりも本来性を高く認知するかどうかを検討するため、本来性の得点 ($\alpha = .87$) を従属変数とした t 検定を行った。その結果、群間差が有意であり ($t(42) = 2.14, p < .05, d = 0.64$)、ノスタルジア群 ($M = 24.04, SD = 5.24$) は日常的記憶群 ($M = 20.29, SD = 6.40$) よりも得点が高かった。

研究2の目的は、本来性への脅威を与えられた状況において研究1の結果が再現できるかを検討することであった。その結果、本来性への脅威を与えられた後であっても、「感傷を伴う懐かしさ」という概念を用いてノスタルジアを喚起させた場合に本来性を高く認知しやすいことが示された。これは研究1と同様、仮説を支持する結果であった。

総合的考察

本研究の結果より、ノスタルジアを説明する際に「感傷を伴う懐かしさ」という概念を用いることでノスタルジアの機能的な特徴が再現されることが示され、仮説は支持された。この結果は、平時の状況と脅威を与えられた状況のいずれにおいてもみられ

ており、知見の頑健性が確認されたといえる。したがって、「個人の過去に対する感傷的な思慕」や「懐かしさ」という言葉よりも、「感傷を伴う懐かしさ」を説明材料として用いることにより、英語圏におけるノスタルジアと非常に近い感情を喚起できるものと考えられる。

ところで、研究1と研究2はいずれも操作が成功していたが、日常的記憶群の操作チェック (ノスタルジック状態) の得点は先行研究 (e.g., Stephan et al., 2012) よりもやや高い傾向にあった。日本が相互強調性の強さによって特徴づけられる文化を持つ国の1つであり (Markus & Kitayama, 1991)、社会的なつながりがノスタルジアという概念の重要な要素である (Hepper et al., 2012; Wildschut et al., 2006) ことを考えると、本邦の人々は日常的な出来事に対して欧米の人々よりもノスタルジアを感じやすいのかもしれない。この点については推測の域を出ないため、今後実証的に検討を行っていく必要があるだろう。

本研究によって、「感傷を伴う懐かしさ」という概念を用いることでノスタルジアにより近い感情を喚起できることが明らかになった。この概念は質的な特徴において全般的な「懐かしさ」よりもノスタルジアに近いことが示されており (長峯, 2016)、本研究の知見は本邦においてノスタルジア研究を進めるうえでの重要な基盤となるであろう。また、ノスタルジアは記憶に関する感情であり、動機づけ的な機能も保持している (Sedikides et al., 2015b)。したがって、ノスタルジアについての理解を深めることは、自伝的記憶の想起と特定の行動 (e.g., 自己探索行動) の関連についての詳細を明らかにするためにも大きな役割を担える可能性がある。

さらに近年、感情心理学者の間で関心が集まっている概念として混合感情 (mixed emotion) が挙げられるが、ノスタルジアは混合感情の代表的なものとして示されている (Braniecka, Trzebinska, Dowgiert, & Wytykowska, 2014)。日本語で適切にノスタルジアを表すことができるならば、混合感情の文化比較という分野の発展に関しても、非常に重要な知見を提供することができるだろう。また、ノスタルジアはその多様な適応性から、臨床心理学への応用が期待されている (Routledge et al., 2011)。そのため、本邦において適切な形でノスタルジアを喚起できるような条件を整えることは、社会的な貢献にもつながると考えられる。

しかし本研究は、「感傷を伴う懐かしさ」の機能的特徴を検討する指標として本来性しか取り扱っていないという問題点も抱えている。ノスタルジアの

多様な適応の機能の中には本来性の向上で説明することが難しいものも存在すると指摘されている (Baldwin et al., 2015) ことを踏まえ、本来性以外の心理的変数についても本研究と同様の結果が得られるか、検討していくべきだろう。

引用文献

- Baldwin, M., Biernat, M., & Landau, M. J. (2015). Remembering the real me: Nostalgia offers a window to the intrinsic self. *Journal of Personality and Social Psychology, 108*, 128-147.
- Braniecka, A., Trzebinska, E., Dowgiert, A., & Wytykowska, A. (2014). Mixed emotions and coping: The benefits of secondary emotions. *Plos One, 9*(8), e103940. doi:10.1371/journal.pone.0103940.
- Hepper, E. G., Ritchie, T. D., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2012). Odyssey's end: Lay conceptions of nostalgia reflect its original Homeric meaning. *Emotion, 12*, 102-119.
- Hepper, E. G., Wildschut, T., Sedikides, C., Ritchie, T. D., Yung, Y. F., Hansen, N., ... & Zhou, X. (2014). Pancultural nostalgia: Prototypical conceptions across cultures. *Emotion, 14*, 733-747.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- Kernis, M. H., & Goldman, B. M. (2006). A multicomponent conceptualization of authenticity. Theory and research. *Advances in Experimental Social Psychology, 38*, 283-357.
- 楠見 孝 (2014). なつかしさの心理学——記憶と感情, その意義—— 楠見 孝 (編) なつかしさの心理学 (pp.1-22) 誠信書房
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review, 98*, 224-253.
- 長峯聖人 (2016). 日本におけるノスタルジアの定義に関する一検討——アンビバレントな感情に着目して—— 日本感情心理学学会第24回大会発表論文集
- 長峯聖人・外山美樹 (2016a). 日本人はノスタルジアを経験しうるか? ——ノスタルジアの“bittersweet”な側面に着目して—— 感情心理学研究, 24, 22-32.
- 長峯聖人・外山美樹 (2016b). ノスタルジックな出来事における過去への認知に関する質的検討 日本パーソナリティ心理学学会第25回大会発表論文集, 69.
- Routledge, C., Arndt, J., Wildschut, T., Sedikides, C., Hart, C. M., Juhl, J., ... & Schlotz, W. (2011). The past makes the present meaningful: Nostalgia as an existential resource. *Journal of Personality and Social Psychology, 101*, 638-652.
- Routledge, C., Wildschut, T., Sedikides, C., & Juhl, J. (2013). Nostalgia as a resource for psychological health and well-being. *Social and Personality and Psychology Compass, 10*, 808-818.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., & Routledge, C. (2008). Nostalgia: Past, present, and future. *Current Directions in Psychological Science, 17*, 304-307.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Routledge, C., & Arndt, J. (2015a). Nostalgia counteracts self-discontinuity and restores self-continuity. *European Journal of Social Psychology, 45*, 52-61.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Routledge, C., Arndt, J., Hepper, E. G., & Zhou, X. (2015b). To nostalgize: Mixing memory with affect and desire. *Advances in Experimental Social Psychology, 51*, 189-273.
- Stephan, E., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2012). Mental travel into the past: Differentiating recollections of nostalgic, ordinary, and positive events. *European Journal of Social Psychology, 42*, 290-298.
- 菅原大地・Tee, E.・長峯聖人・Tamilselvan, R.・宮川裕貴・杉江 征 (2018). 混合感情の文化比較——認知的評価理論の観点から—— 日本感情心理学学会第25回大会発表論文集
- 津上英輔 (2009). 懐かしさと nostalgia——比較美学から感性史へ—— 美学美術史論集, 18, 140-164.
- 津村健太 (2015). ノスタルジアが自己連続性に与える影響の検討 一橋社会科学, 7, 43-52.
- Vess, M., Arndt, J., Routledge, C., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2012). Nostalgia as a resource for the self. *Self and Identity, 11*, 273-284.
- Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge, C. (2006). Nostalgia: Content, triggers, functions. *Journal of Personality and Social Psychology, 91*, 975-993.

(受稿 4月27日: 受理 5月29日)